

# APUにおける初級中国語学習者向けの学習指導法<sup>1</sup>

—復旦大学の外国人向け中国語教育実態から学んだ経験と教訓—

呉 青姫

## アブストラクト

本稿は2009年度「ファカルティ・イニシアチブ・プログラム」の採択による研究報告書であり、2010年3月に中国の復旦大学<sup>2</sup>を視察した際に啓発された外国人向け中国語教授法と、2010年春学期に直接指導にかかわった初級中国語クラスでの学習指導状況を紹介する。また、今後の学習指導やカリキュラム作成時の参考とするために、初期中国語指導過程における問題点および指導上の到達状況を明らかにしたい。本稿にかかわる主な内容は、APUにおける中国語教授法改革の経緯と背景の紹介、復旦大学の外国人向け中国語カリキュラムの紹介、直接教授法による指導と適用のプロセス、重回帰分析による学習者の動機付け調査の結果など多岐にわたる。分析から浮かび上がった主な結果は、直接教授法は早い段階から目標言語に慣れさせ、言語習得のセンスを鍛える意味では効果のある教授法だと判断できる。しかし、中国のようにたえず目標言語にさらされる環境に身を置いていない場合はかえってコミュニケーションに不安を覚えさせるため、実行過程においては特別な留意が必要となる。一方、教授法の改善と同時に学習者を動機づける指導も重要であることが実証できた。本稿の分析に用いたデータは、2010年春学期に中国語Iを履修した二クラスの履修生の学習実態記録と期末筆記試験の成績および学期はじめと学期末の二回にわたり、履修生を対象に行った意識調査である。

**キーワード：**中国語教育、イマージョン・プログラム、直接教授法、心理的バリアー、学習の動機付け

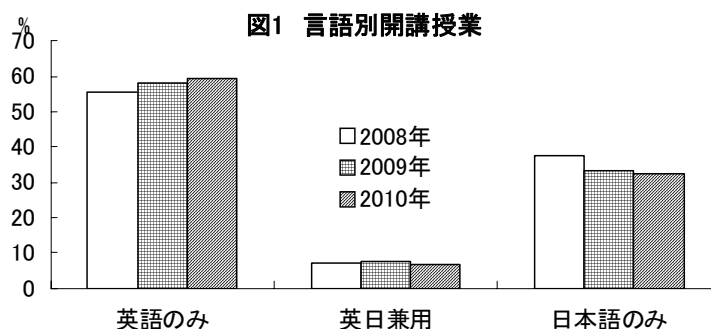
## 1. はじめに

### 1.1 研究の背景

現在立命館アジア太平洋大学(以下APUと略す)の開講科目は言語教育科目・基礎教育科目・専門教育科目・シェルター科目に四分類できる。基礎教育科目・専門教育科目・シェルター科目では日本語以外に英語も適用しているため、授業中の使用言語によって分類すると、英語のみによる授業、日英両言語を兼用した授業、日本語のみによる授業に三分類できる。言語教育科目では日本語と英語が必修科目である以外に、中国語、韓国語、マレー・インドネシア語、スペイン語、タイ語、ベトナム語の合計6種類のアジア・太平洋言語(以下AP言語と略す)科目が専修科目となっている。図1は言語科目以外の科目を使用言語別にグラフ化したものであるが、2008年度から今年度にかけて英語のみによる専門科目の授業科目数は4.14%上昇している。2010年夏現在で2,004の開講科目のうち、言語科目とシェルター科目を除いた1,534の専門科目と基礎科目の約6割を占める913科目が英語を使用した授業となっている。

APUは2005年7月から現行のイマージョン・プログラムをスタートさせたが、ここでいう「イマージョン・プログラム」とは夏休みや春休みの期間を利用して海外で4~6週間の語学集中授業を履修することで単位が得られるプログラムであり<sup>3</sup>、第二言語による科目教育という本来のイマージョン・プログラムのことではない。従来、応用言語学で用いられる「イマージョン」の意味は、広瀬(1988)や湯本(2003)など多くの先行研究で述べられているように、英語の意味をそのまま解釈すると「浸される」、「包み込まれる」ということである。1960年代カナダのケベック州で継承教育に適用されて以来、効率的な指導方法として知られるようになった。このようなプログラムは元来言語そのものを習得させる目的ではなく、第二言語による教科学習に用いられた方法であった。1992年に沼津市の加藤学院暁秀初等学校で実験的に実施された英語イマージョン・コースが成果を挙げて以来、日本国内でも多くの学校が同プログラムを導入している。このような解釈に基づくと、現在言語教育科目を除いたAPUの専門科目と基礎科目の授業は英語と日本語の両言語で行わ

れ、中国語や他の AP 言語では開講されていないため、APU におけるイマージョン・プログラムという用語は英語と日本語による基礎教育科目および専門教育科目がそれに当たっており、中国語や他の AP 言語を用いたイマージョン・プログラムは存在しないはずである。しかし、念頭におきたいのは APU の「イマージョン・プログラム」はこれらと概念が異なることである。他にも言語教分野においては媒介言語を使用せず目的言語を用いた教授法として直接教授法等が挙げられる。



出所) 2008年～2010年の学内「シラバス登録科目」に基づく。

APU で用いる「イマージョン・プログラム」とは、海外で集中的に約 5 週間の語学授業を受講することにより、二クォータ履修したのと同様の単位を獲得することができるプログラムのことである。中国語分野ではこのような大学の方針に迅速に対応し、2007 年夏から中国大連の東北財経大学と連携し、夏休みの言語集中学習の履修生を送り出した。同プログラムは年二回に分けて学生を中国に送り出し、春休みには杭州の浙江大学に送り出している。参加者は年々増加しており、開始当初には 10 人未満の応募であったが、2010 年の 8 月時には 25 人の応募があった。同プログラムで中国での学習と生活を経験した学習者達の中国語は目立って上達しており、学習者自身の満足度も高い。しかし APU における同プログラムに参加していない一般の中国語履修生は上達が遅れているため、このギャップをなくし、APU 中国語教育の改善を図る目的で、2010 年 3 月に曹瑞林教授を代表とした中国語教員一同は上海の復旦大学と華東師範大学、杭州の浙江大学における外国人向け中国語教育の状況を視察した。

## 1.2 研究の目的

中国の復旦大学の指導法を教訓に 2010 年春学期から中国語の授業では、直接教授法を導入し、発音練習を強化した。具体的には、2010 年春学期から中国語 I～IV のすべての中国語履修生を対象に従来の「訳読式」教授法などを一切なくし、媒介言語を使用しない完全「直接教授法」に切りかえた。また中国語 I を対象に声調・子音・母音の発音とピンインの読み書きができるように指導するようにした。

このような中国語教育法改善の大きな流れの中で、われわれ中国語教員は各自の教育方法の詳細を工夫することが求められた。当時筆者が担当したクラスのシラバス作成時における主な課題は、①四技能(読み、書き、聴き、会話)を総合的に上昇させるためにはどのようなステップを踏んでラウンド・アップ式指導をしたらよいのか、②直接教授法を導入するに当たって如何に学習者の心理的バリアーをなくし、学習者発信型の授業にし、会話力を上昇させるべきか、③教師と学生と一緒に営むインターアクティブな授業をどのように創るべきか、④学習者のモチベーションをどのように向上させるかであった。これらの課題解決のための詳細な取組みに関しては、次の節で紹介する。

ここではまず本稿で取り上げる「直接教授法」に関して触れておく。同教授法は文法訳読教授法への反省と批判から生まれたものであり、言葉どおりに媒介言語を使わず直接目標言語のみを使う教授法である。同法は外国語の習得は聴覚と発音器官の訓練によりスタートさせるべきであるとの主張のもとで生まれたものであり、文字や文法よりも音声優先させ、実物や仕草によって学習者に外国語の意味を認知させることなどを重視している。外国語学習において「読み・書き・聴き、会話」の四技能の習得は欠かせないものであるが、直接教授法はまず音声言語を扱い、次に文字言語を扱う。文法は言語に対して相当馴染んだ段階で体系的に教えるべきであり、翻訳はより最後の段階で行うべきである。

としている。そして、クラスの人数は5、6人の少人数制による習得がよいとの見解もある。当然のことながら、直接教授法に対しては批判も多く、母語との文型体系の比較を行わず、目標言語によって認知させようとするのは、早い時点から外国語によって自分の意見が言えるようにはなるが、母語の文型構造のままの流暢であっても正確ではない話し方になりがちだという限界が指摘されている。特に青少年期における言語習得を、母語を学ぶ幼児の状態と比較すること自体が非現実的であるという強い批判がある。

以上が研究の背景と本稿と関連のある教授法の説明であるが、各節の構成は以下の通りである。

続く節ではまず初級者向けの中国語授業における指導上の課題を取り上げ、その過程で生じた問題点と問題解決の過程を紹介する。第三節では、指導の到達度を考察するが、これらに関しては2010年春学期における履修生による期末筆記試験の結果と意識調査に基づいて目標到達結果をデータ化することにより評価する。さらに評価だけに止まるのではなく、今後の指導への参考のため、直接教授法でよい成績をあげている学習者の学習動機を探る目的で重回帰による実証分析を行う。第四節の「おわりに」では、本稿の結果を再整理することで、今後の課題を提示する。

## 2. 教育課題への取組み

### 2.1 復旦大学の初級者向けカリキュラム

APUでは直接教授法は導入することになったものの、四技能をどのような順番で教えるべきなのかが一つの課題となった。よって2010年春学期に担当した中国語Ⅰの授業方針の策定にあたっては、復旦大学の初級者向けカリキュラムを参考にし、直接教授法を実行しつつ、読み書きに重点をおいて四つの総合技能を上昇させるようにした。以下では、復旦大学・国際文化交流センターの外国人向け中国語教育における長期学習者向けのカリキュラム全体を紹介し、初級中国語指導における重点的ポイントを述べる。同調査の目的、学習者状況、語学レベルなどの詳細に関しては、注2で触れたように、本誌所収の中国人教員一同による調査報告書を参照されたい。

復旦大学・国際文化交流センターの長期学習者向けのカリキュラムでは、入学前の筆記試験結果に基づき細かいクラス分けがなされ、各学習者のレベルに合う目標が設定される。また授業は直接教授法で行われるが、文法理論も教授され、理解と実践が結合するように考えられている。表1が長期学習者向けのクラス分けである。クラスは初級から上級までAからJの10段階に細かく分類されている。初級から上級レベルまでの一コマの授業は45分である。一週間の授業回数をみると、初級と中級までは週約20コマの授業をし、上級クラスでは週14コマの授業である。一学期を通してみた場合、約16週から18週間の授業が提供される。

一週間の授業時間は、AとBレベルでは「読み書き」：「ヒアリング」：「作文」の授業をそれぞれ12：6：2時間に設置してある。ここで基礎固めをした後にCとDレベルでは会話力と聴解力をアップさせるように、精読<sup>4</sup>：口語：汎読<sup>5</sup>：聴解：作文の授業がそれぞれ10：4：4：2：2時間配置されていた。中級のE～Hクラスでは精読：口語：聴解：汎読：作文がそれぞれ8：4：4：2：2時間配置され、上級のIとJクラスは精読：社会問題：新聞閲読：ニュース聴解がそれぞれ6：4：2：2時間配置されていた。このように一週間単位でカリキュラムの詳細をみると、全コースの目標設定はステップ・アップとラウンド・アップの混合形式で設計され、初級では読み書きに、その次のCとDレベルでは読解力と会話力に、中級のEからHレベルでは文章理解力と文章作成力の養成に重点がおかれる。さらに上級のIとJクラスでは、新聞やニュースの理解力向上が重視されている。

表1 2010年春学期開講のクラスとレベル分け(本科は除く)

level	初級			中級				上級		特色クラス				
Class名	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	漢字読写 速成班	日中商務漢語班中 上級(依頼開講)	中国経 済班	漢語言上級 文化研修班
開講Class数	6	8	6	4	2	1	1	1	2	0	1	各1	1	1
コマ数/週	20(CとDは22)								14		9	10(中)/17(上)	17	20
人数/クラス	約20人前後								未知		8(中)/10(上)	28	5	

注)一学期は16～18週で一週間の授業日数は5日、一週間の授業数は20コマ、一授業時間は45分である。

出所)2010年3月の上海復旦大学でのヒアリング調査と資料収集による。

このような授業配置は教授すべき重点が明確で、長い目でみると言語教育に非常に望ましい配置である。読み書きにポイントを置きつつ学習者の総合能力の上昇を目指す形をとっている。学習内容を徐々に深めつつ同時に既習事項を復習させることをねらった、縦横を組み合わせた教え方であるといえよう。

## 2.2 APU の中国語初級者状況

授業の状況に触れる前に本節ではまず、アンケート調査対象者である受講生の属性を紹介する。一クラスは 25 人編成で、受講生の属性は表 1 のとおり、外国人留学生在が 1/3 を占めているものの、半数以上は日本国籍の学生であり、その中には父親と母親の国籍が異なるハーフの学生が 2 名(タイ人系とアメリカ人系)在籍している。マルチリンガルなクラスであり、国際性が豊かであることが特徴である。外国人留学生を国別に分けると、韓国国籍が 7 名、ベトナム国籍が 2 名、タイ国籍が 1 名、モンゴル国籍が 1 名である。

直接教授法は一部の外国人留学生には非常に歓迎された反面、多くの日本人学習者には好まれなかった。事実、学習の初期段階においては、中国語による説明が聞き取れないことによる不安とストレスで不満や苦情を訴える学生もおり、途中でドロップアウトした学生も数人いる。このような事情に関しては次の節で詳しく触れることにする。

表 2 分析対象者属性

調査対象学期	2010 年春学期
中国語科目	中国語 I
国籍別構成	日本人学生 26 名、国際学生 13 名
性別構成	男性 18 名、女性 21 名
履修者平均年齢	21 歳
中国語学習歴がある学習者	7 名

注) 「国際学生は」 APU 独自の表現で、外国人留学生のことを指す。

出所) 2010 年春学期アンケート調査による。

## 2.3 初級者向けカリキュラムの設定

中国語 I の共通の目標として、簡単な日常会話ができることがあげられている。そのために中国語 I では、声調・子音・母音のきれいな発音、基本語彙、基礎文法の習得などが求められる。このような共通の目標に到達すると、次のステップとして、より体系的な文法知識と社会言語力、社交談話力、中国に関する知識などの面で、より高い運用力が求められることになる。2010 年春学期の授業では、表 3 のように学習者同士の学び合いを中心にアクティビティーを多く設定したものの、どのようにして目標に達成すべきなのかの問題が各教員達にとって課題となった。学習者がより主体的、積極的に参加できるような授業形式を追求し、教員と学習者、学習者同士のインターアクションが活発な「教員指導型 + 学習者主体型」を創ることを目指したが、課題となった四技能の習得順序に関しては、復旦大学のカリキュラムを参考にしつつ新たに創ることが求められた。

表 3 授業実行状況

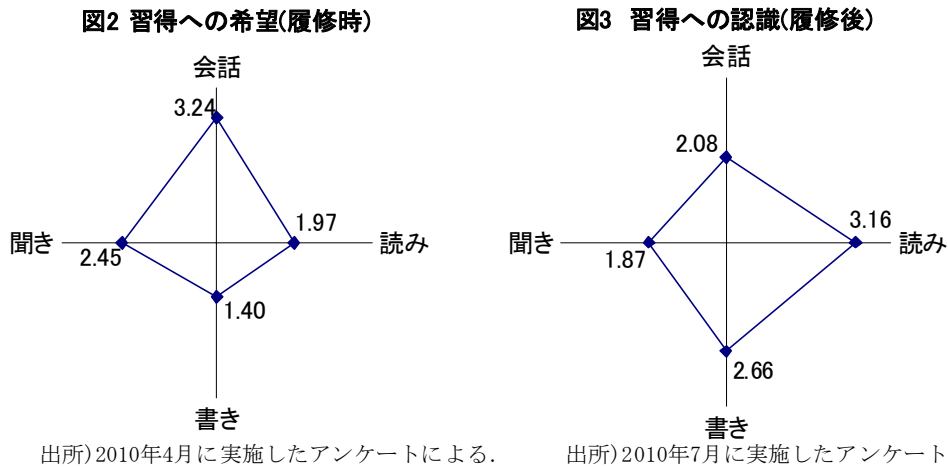
	1 回目	2 回目	3 回目	4 回目
前半	単語解釈	文法解釈	文法練習	グループ作業
後半	朗読	文法練習	総合練習	ロールプレー

注) 網掛けの部分がアクティビティーをした内容になる。

出所) 筆者作成。

2010 年 4 月の開講時に、学習者に四つの基本技能のニーズに対してアンケートを実施した。学習者が習得を希望する

順を集計してみると、「会話・聞き・読み・書き」が4:3:2:1の比例であった。図2は、その平均をデータ化したものである。学習者のニーズに応え、会話力を上昇させることが重要であったが、学習者の総合運用力を向上させるためには、当然ながら授業の展開を考える際に優先順位をつけなければならなかった。つまり復旦大学のように読み書きに重点をおき、四技能のステップ・アップとラウンド・アップを融合させた総合力上昇に向けた授業を創ることだった。



この目標達成に向けて、語彙とフレーズを正確に覚えさせるための工夫をした。よく読むためには語彙を正確に覚えなければならない。特に言語を学習する上で単語の習得は非常に重要である。日本人はコミュニケーションを行う際に、相手が何を言ったのかということよりも、話者がどのような場面でどのようなことを言ったのか、という周延的な背景を重視する傾向が強い。しかし中国は56の少数民族が混在している多民族国家であり、お互いの意思疎通をはかるためには、言語を重視した低コンテクストのコミュニケーションが期待され、正確に自分の意志を相手に伝えなければならない。

従って、はっきりと物事を伝えるためには、正確な語彙を使った伝達が必要となり、そのベースとして語彙とフレーズの記憶が必要である。また書くことに関しては、学期を通じて3回に分けて200字程の文を書かせ、文法と語彙の選び方に関して細かい修正指導をおこなった。

次に読ませることを工夫した。読む過程は中国語の文法を習得する過程でもあり、同時に発音の修正をする過程でもある。さらにこの過程は会話力を上昇させるための基礎づくりの過程でもある。読む形式に関しては、声に出した読み方だけでなく、音を速くキャッチできるようにスピード読みをさせるなど様々な工夫をした。読むということは会話力上昇に繋がり、コミュニケーション能力を養う前段階でもある。直接教授法が目指す最終目標は、学習者のコミュニケーション力の上昇であるが、それにはまず会話力が問われる。Canale & Swain (1980)はコミュニケーションを、言語規則に関する知識、文法能力、文脈に適した言語行動能力、社会言語能力、目的を目指してメッセージを伝達するストラテジーという総合能力であると定義している。つまりコミュニケーション能力というのは、言語能力と非言語能力を融合させて、相手の意図や状況変化に応じて適切に対応していける能力のことである。そこでカーネルとスウェインが定義したコミュニケーション能力に到達するまでのステップを図4のように整理した。

2010年春学期の授業のスタイルは、最初から中国語による授業であったため、特に非言語や受信型のコミュニケーション方法に慣れていない日本人学生達には、心理的バリアーが高かった。自主的な発信型の学習者へと変えていくためには、まず学習者のコミュニケーション不安(Communication Apprehensionのことを指し、以下CAと略す)をなくさなければならなかった。よって蓄積した基礎知識を応用させる工夫として、語彙や文法上の多少の間違いがあっても学習者にはたくさんしゃべらせるよう、毎日少しの時間を与え、金曜日は主にグループ・ワークの時間に当てた。またそれと同時に授業にアクティビティーをできるだけ多く取り入れるようにした。グループ作業は学習者が間違えたり、

答えられなかったりした時の気まずさをなくすためには効果的であり、またこのような共同作業を通じてお互いにまなび合い、教え合うこともできる。前のページの表 3 の網掛け状の部分が学習者同士の共同作業の時間である。そのほかにも CA 低減のための取り組みとして、練習問題をさせる時には学生の近くを巡回することで、CA が高い学習者に質問のチャンスを与えるなどの工夫をした。また学生の近くで中国語による会話のインターアクションをし、少しずつ CA を解消する方向へと導いた。中国語による交流では、文法の完璧さを求めるよりは、しゃべることに意義をもたせた。以上のような工夫を通して学期末には、自分から進んで発言しようとする学生の割合が半数を超えるようになった。このことは直接教授法への抵抗感を大きく減少させることができたということをも物語っている。学期末には各学習者はグループ作業に溶け込み、多少の文法上の間違いや語彙の誤用例があったとしても、ボディ・ランゲージなどのジェスチャーを使って、お互いに中国語でコミュニケーションをはかろうと努力している姿などが見られた。

図4 コミュニケーション能力養成へのステップ

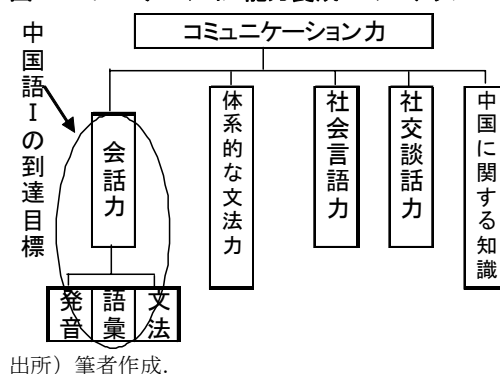


図 3 は、7 月の学期末に行われた 2010 年春学期末の意識再調査で、四技能のうち自分が最も習得できたと思う技能から 4:3:2:1 の順に回答してもらった結果である。以上のような授業の工夫で、自分の習得度に対する認識は図 3 のように「読み・書き・会話・聞き」の順に高いと答えると同時に、総合力の向上を目指した直接教授法の指導に対しては 7 割の学生からは満足したという回答があった。

### 3. 指導課題解決への評価

#### 3.1 期末筆記試験の結果分析

本節では、2010 年春学期の期末筆記試験結果を用いて 2010 年春学期における指導達成状況を評価する。以下は同学期末筆記試験の出題形式と到達状況をデータ化したものである。試験は合計 55 問で、出題内容は表 4 のように総合能力の測定を目指したものである。試験は大まかにヒアリングと読解が中心であったが、細かくみてもヒアリング(声調、語句理解、単語判断、会話理解)、写真を見て短文を書く問題、文法、読解、翻訳などの問題が出され、基礎学力の習得の偏りによっては大きく成績ギャップが生じるように設計されている。

表 4 2010 年春学期末筆記試験の出題形式

問題 No.	問題数	出題形式
第 1 問	5	声調が異なる四つの単語のうち、正しいものを聞き取って選択する
第 2 問	5	短いセンテンスを聞き、内容が正しいか間違っているかを判断する
第 3 問	10	二人の会話と質問を聞き、答えを選択する
第 4 問	5	短いセンテンスを聞き、与えられた選択肢から正しいものを選ぶ
第 5 問	10	写真とピンインで書かれた質問を理解し、漢字で答えを書く
第 6 問	10	語順の異なる四つのセンテンスの中から正しいものを選択する
第 7 問	5	ピンインで与えられた文章を理解し、ピンインによる質問に対して漢字で回答する
第 8 問	5	日本語で与えられたセンテンスを中国語に訳す

出所) 2010 年春学期の試験用紙による。

各カテゴリー別の詳細な結果は図5でまとめたとおりであるが、今学期の成績の平均点は83点で全体的に好結果となった。図5は、2010年春学期末筆記試験の試験問題を第1問から第8問まで成績得点を均等化して図示したものである。図5からは中国語Iの当初の目標がある程度達成できたことがわかる。最高点を20と設定した場合、特に基礎学力としてみなされる第1問の声調の聞き取り問題の到達点は17.74であり、第3問の語彙判断問題は18.82、第5問の写真を見て各自の認知により短文を書いて回答する問題は16.92、第六問の正しい語順で書かれた文をさがす問題は17.39だった。しかし、第4問のように会話全体の意味を把握する問題や第7問のようにピンインによる文章の読解問題は好成績につながらなかった。これは授業開始時に工夫が足りなかったのが原因であり、今後の指導の目標設定と授業展開においてさらなる工夫が必要であることを示唆している。



出所) 2010年7月期末試験データによる。

### 3.2 成績向上の要因分析

前節まで直接教授法による成果を述べた。ところが第二節でも取り上げたように、CAが高いにもかかわらず、授業中積極的に発言し、良い成績を上げている学生(80点以上)もいる。高得点者は普段の発言頻度が高く、得点と発言の頻度との間に正の相関関係が存在しており、有意水準5%で有意性をもつことが検証できた。様々 unnecessaryな要素を排除して考察した場合、このように発言の頻度が高い学生の多くは発音が正確だけでなく、会話力と表現力が優れている。よって本稿では、課題解決の評価だけに止まらず、直接教授法を再評価し、今後の指導上の参考とするため、学習モラルと履修目的をターゲットに成績要因分析を行った。本節では今後の学習指導上、参考にするため、成績決定要因を重回帰分析によって実証した。以下ではそのモデルの提示及び成績向上の要因分析結果に関して述べる。

成績関数は各学習者の学習モラルや学習目標および普段の努力の積み重ねに起因するものと考え、そのモデル式は以下の1式のように単純化する。

$$Score_i = a_i + Satisfaction_i + Moral_i + Purpose_i + Effort_i + u_i \quad (1)$$

$a_i$ : 定数項	Satisfaction: 直接教授法を評価する変数	Score: 成績変数
Moral: モーラル変数	Purpose: 学習目標変数	Effort: 普段の努力変数
$u$ : 誤差項	$i$ : 各個体	

変数の作り方及び分析に使われた被説明変数と説明変数の定義は以下の通りである。

- 1) 被説明変数: 2010年春学期末筆記試験の成績得点(実数)であり、会話試験、出席点数などの評価は含まない。

## 2) 説明変数

### A. 直接教授法を評価する変数 :

・変数作成の説明 : 「今学期の中国語による授業に大いに満足した、満足した、どちらともいえない、満足してない」の項目から選んでもらった。(満足した=1、その他=0)

分析結果の説明 : 満足度をパーセンテージで評価した場合、中国語による直接教授法に対して 7 割以上が「大いに満足」「満足」と回答したにもかかわらず、成績上昇への有意性は見られなかった。よって今学期における直接教授法は必ずしも成果を挙げているとは評価しがたい。

### B. モーラルを表す変数

#### ① 「毎日 1 時間以上中国語を勉強する」ダミー変数 :

・変数作成の説明 : 「毎日予習・復習のために一日何時間ぐらい勉強しましたか?」という質問に対し、三つの選択肢を与え、それぞれ「a. 1 時間、b. 2 時間、c. 2 時間以上」の中から選択してもらった。(b もしくは c を選んだ場合=1、そうでない場合=0)

・分析結果の説明 : 係数値がマイナスで 10% 有意をもっていることは、長い時間をかけて勉強をするからよい効果が得られるのではなく、1 時間以内の勉強でも毎日勉強を積み重ねていくほうがよりよい成果に結びつくことを意味する。

#### ② 「普段中国人とよく交流する」ダミー変数 :

・変数作成の説明 : 「周りに中国人の友人や知り合いがおり、普段よく会い、よく話をする」の項目を選んでもらった。(丸をつけた変数=1、そうでない場合=0)

・分析結果の説明 : 普段から中国人と中国語で交流している学習者のほうが自信をもって授業中よく発言をし、よい成績を取ることができるという結果が検証できた。一方、中国人と交流の機会がない学生のためには TA セッションをより多く設けるなどして、中国語で会話ができるように工夫する必要があることを意味する。

### C. 履修目的を表す変数

・変数作成の説明 : 「今後中国語 II を履修する意志がある場合以下の選択肢の中から三つの選択肢を選んで重要と思う順に答えなさい」の項目で以下の選択肢を選んでもらった。

#### ① 「将来就職の際に役立つと思う」ダミー変数(選んだ場合=1、そうでない=0)

#### ② 「HSK や中検を受けるため」ダミー変数(選んだ場合=1、そうでない=0)

#### ③ 「留学するため」ダミー変数(選んだ場合=1、そうでない=0)

#### ④ 「面白くて好きだから」ダミー変数(選んだ場合=1、そうでない=0)

#### ⑤ 「中国語のドラマが見たい」ダミー変数(選んだ場合=1、そうでない=0)

#### ⑥ 「中国文化に触れたい」ダミー変数(選んだ場合=1、そうでない=0)

・分析結果の説明 : 履修目的で有意な結果となったのは、就職のために勉強する変数と中国語能力試験を受けたいから履修する変数であった。まず、将来就職のために中国語の授業を取っている学生が 63.2% 集計されたにもかかわらず、係数値がマイナスで 5% 有意となったことは、就職を目標としている学生は目標設定はしているものの、モチベーションが高くなかったため、成績上昇には繋がらなかった。しかし HSK や中国語検定試験など受験目的であれば、成績に正の影響を与えていることが 5% 有意水準で確認できた。また「留学するため」と「中国語でドラマが見たい」と思っている学習者の実証結果は有意ではなかったが、プラスの結果が得られたので、このような要因も成績には積極的な作用をしていることが分かる。「面白くて好きだから」や「中国文化に触れたいから」の目的では有意性はなかったが、係数符号がマイナスとなっていることは、興味深い点である。この結果からは、具体的な目標設定がなく、漠然とした関心で学習した場合、関心のある分野の知識は上昇する可能性はあるが、直接に成績向上に繋がらないことが考えられる。また「中国文化に触れたい」という学生の成績が向上していないことから、このような学生を刺激して成績向上に導くためには、授業中に中国文化に触れる機会をより多く設けていくということも改善策の一つとして指摘できる。



#### D. 平常成績変数

- ・変数作成の説明：毎回の単語課題の完成度が高く、毎日の単語成績の合計点が90%以上達成できている場合=1、そうでない=0

分析結果の説明：平常成績と期末成績の間には正の関係が存在し、1%有意となっている。これはやはり普段からの学習の積み重ねが全体のレベルの上昇に繋がることを意味する。

表5 成績決定要因

説明変数		分析結果		基本等計量			
		係数	P値	最大値	最小値	平均値	中央値
直接教授法に対する満足度		0.594	0.387	1	0	0.731	1
モーラル	毎日一時間以上中国語を勉強	-7.637	0.048 *	1	0	0.447	0
	普段中国人とよく交流する	7.186	0.05 *	1	0	0.263	0
履修目的	将来就職の際に役立つ	-10.924	0.012 **	1	0	0.632	1
	HSKや中検を受けるため	9.039	0.028 **	1	0	0.211	0
	留学するため	6.881	0.119	1	0	0.263	0
	面白くて好きだから	-1.353	0.706	1	0	0.342	0
	中国語のドラマが見たい	5.941	0.311	1	0	0.105	0
	中国文化に触れたいから	-3.788	0.261	1	0	0.342	0
平常成績		16.392	0.000 ***	1	0	0.553	1
定数項		81.698	0.000 ***				
修正済み決定係数		0.238					
サンプル数		38					

注)\*\*\*は1%有意、\*\*は5%有意、\*は10%有意を表す。

出所)筆者作成。

#### 4. おわりに

以上本稿では、APUの中国語Iの二クラスを対象に2010年春学期の中国語指導の課題とその到達状況をまとめた。これらの考察の際には、授業目標の設定および指導過程における問題点を取り上げ、その評価として期末筆記試験とアンケート結果をデータ化した。最終的には重回帰モデルにより、成績向上のための要因分析をした。

これらをまとめると、直接教授法は今学期はじめて導入した教授法であり、予期した指導目標まである程度達成でき、学習者が四技能を総合的に習得する上でも一定の成果をあげたと評価できる。このような成果をあげた要因として、アクティビティーやグループ・ワークによる共同作業と、文法や語彙上の多少の間違いがあっても厳しく頻繁に追求しない指導法などによる効果が考えられる。学期の最終段階では、学習者がボディ・ランゲージなどを使って自分からコミュニケーションをはかろうと努力する印象的な姿もみられた。本稿では触れなかったが、そのような努力姿勢は期末の会話試験でもみられた。今後も基礎力向上とともに学習者発信型の授業への取組みをより工夫すべきであろう。

しかし、表5の結果で確認できたように、直接教授法に満足していると回答した学生比率は高くても同教授法が直接成績向上には繋がっていないことがわかった。また、日本人学習者が大半を占めているAPU中国語クラスのような環境において、日本人学習者を対象に初級段階から目標言語である中国語を適用する場合には特に注意が必要である。なぜなら、日本における学習者は中国国内の外国人学習者と異なり、日常たえず目標言語にさらされる環境に身を置いているだけでなく、日本人学生は控えめで自分の気持ちを人に伝えることが得意でないため、教員は授業中学習者のCAを察知するのに留意しなければいけない。CAが高い学習者に初級段階から目標言語を使って指導すると、言語を積極的に使ってみようとする意欲が低下していく可能性があり、やる気を失うことにも繋がる。初期段階には日本語と中国語を折衷した説明から導入し、ある程度中国語を理解する能力が蓄積できてから目標言語に切り替え、徐々に浸透させる形が学習者にはより受け入れやすいことが確認できた。

また最後の節で分析したように、言語学習には学習者自身の努力が不可欠であることも再確認できた。学習の動機付けが非常に重要であると同時に、効果的な学習方法として、通常の努力の積み重ねや、技能本位の目標ではなくモチベーションが高くなるような目標設定および中国人との日ごろの交流などが不可欠である。よって今後の指導法においては、言語技能上達の指導と同時に、学習者のモチベーションを向上させる工夫や中国語による交流を促進させるようなフォローが必要である。つまり同じ内容を教えたとしても学習者側が正確な目的意識をもたなければ学習効果が上がらないため、やる気を出させて中国語学習を継続させるようにするためには、学習者に短期および長期の目標をもたせる指導が必要である。

2010 年春学期の中国語 I クラスでは良い成績をあげたものの、会話理解力と文章読解力がまだ欠如していた。APU の中国語指導における直接教授法の取組みはその開始からまだ日が浅いため、今後さらなる検証が必要であり、教育方針や授業の到達目標の設定、カリキュラムの設定なども今後改善していかなければならない。さらに、中国国内の外国人向け中国語教育やその他の科学的な学習指導法を参考にしながら、APU での中国語教授法を模索していく必要がある。

## 謝辞

本稿の作成にあたっては、2010 年春学期に筆者が担当した中国語 I の二クラスでとったアンケート調査をもとに分析しているが、当時アンケートを承諾し、回答に協力してくれた学生諸君に感謝の意を表したい。また日本語の修正をして下さった西川孝次先生、そして本誌への掲載が決まるまで有益なコメントを寄せて下さった編集委員の方達にも心より感謝申し上げる。

## 注

1. 本稿は 2009 年度「ファカルティ・イニシアチブ・プログラム」による研究報告書であるが、筆者個人の教育体験による見解であり、中国語教員全体のそれでない。
2. 2010 年 3 月中国で視察した内容に関しては曹瑞林らによる報告「中国の名門大学における外国人学生向け中国語教育」(本誌 pp. 117-128) を参照のこと。“直接教授法”は同報告では“直接法”と表現されている。
3. APU は 2000 年 4 月の開学以来二言語教育システムを取っている。2010 年度現在やや英語媒介授業が多くなっているが、開学期には全学術科目の約 50% が英語、残りの約 50% が日本語で提供されるという思い切った英語イマージョン、日本語イマージョンであった。2005 年に海外派遣プログラムに単位付与し、それを「イマージョン・プログラム」と呼称するようになったのは明らかに用語の転用である。
4. 「精読」とは読解の一種で、細かい理解が求められ、文法の説明や語彙の意味を正確に理解しながら読む方法のことを指し、英語で intensive reading と訳される。
5. 「汎読」とは読解の一種で、細かい理解は求められないが、総合理解力が求められると同時に大量の「読み」が求められる読み方を指し、英語で extensive reading と訳される。

## 参考文献

- 赤沢真世 (2008) 「第二言語教育におけるホールランゲージ・アプローチに関する一考察: 「ホール」の意味する言語観・言語教育観をふまえて」『京都大学大学院教育学研究科紀要 第 54 号』166-179
- 広瀬孝文 (1988) 「イマージョン方式言語教育の意義と適用に関する一考察」『聖徳学園岐阜教育大学紀要 第 15 号』83-103
- 湯本和子 (2003) 「カナダのバイリンガル教育・日本のバイリンガル教育」『神奈川県立外語短期大学紀要・総合篇 第 26 号』1-29
- Canale, M. & Swain, M. (1980). Theoretical bases of communicative approaches to second language testing. *Applied Linguistics*, 1:1-47